

# 関市議会 観光振興に関する調査特別委員会

## 行政視察報告書

- 1 視察日程 平成28年10月24日(月)～10月25日(火) (2日間)
- 2 視察事項 京都府綾部市 ○廃校施設を活用した交流人口拡大の取組みについて  
福井県小浜市 ○地域資源を活用した観光振興の取組みについて
- 3 参加者 委員長 西部 雅之  
副委員長 田中 巧  
委員 渡辺 英人  
委員 桜井 幸三  
委員 松田 文男  
委員 武藤 隆夫  
委員 鵜飼 七郎  
委員 幅 永典  
委員 市川 隆也  
委員 長屋 和伸  
委員 猿渡 直樹  
議長 三輪 正善  
随行者 西部 延則 (議会事務局次長)  
随行者 伊藤 敦子 (議会事務局)

## 視察No. 1 廃校施設を活用した交流人口拡大の取組みについて

訪問日時 平成28年10月24日（月） 13時30分～15時00分

訪問先 所在地 京都府綾部市鍛冶屋町茅倉9  
名称 綾部市里山交流研修センター  
担当部署 定住交流部観光交流課・NPO法人里山ねっと・あやべ

### 説明内容（概要）

綾部市は、京都府の中央北寄りに位置し、面積約347km<sup>2</sup>、人口約33,500人の都市である。美しい自然環境や豊かな里山・田園と農村の暮らし、歴史・文化に彩られた市街地、ものづくりを中心とする多様な産業の集積、また京阪神地域と日本海地域をつなぐ交通の要衝地であることなど、様々な機能や特性を備えたまちである。

綾部市では、児童数の減少により廃校となった旧豊里西小学校の施設を「里山交流研修センター」として整備し、都市農村交流を行う組織を行政主導で立ち上げ、体験型交流を将来の定住につなげる取組みを行っている。取組みの経緯、主な内容は次のとおりである。

#### 廃校施設再整備の経緯一覧

平成11年3月	・豊里西小学校閉校（豊里東小学校と統合し豊里小学校に）
平成12年7月	・里山ねっと・あやべ発足（任意団体）
平成12年9月	・里山交流研修センター供用開始
平成15年度	・宿泊施設の整備について検討
平成18年3月	・里山ねっと・あやべがNPO法人化／宿泊棟改修工事竣工
平成18年4月	・市が指定管理者制度を導入／里山ねっと・あやべが指定管理者
平成18年11月	・幸喜山荘整備工事竣工（永井幸喜氏浄財）
平成26年11月	・「森の京都」綾部マスタープラン策定／拠点新施設整備の計画策定
平成27年7月	・平成26年8月の豪雨により被災した体育館等の解体工事完了
平成28年8月	・新施設整備工事着工（平成29年3月完成予定）

#### ○廃校決定後の利活用に関する検討内容

決定当時は市教育委員会と地元対策委員会において、「学校があったときの賑わいをなくさないよう地域の交流拠点として活用してほしい」、「地域の特性や活性化に繋げるなど、将来展望に立った構想としてほしい」との要望に基づき検討を行った。また、その当時、市の総合計画を策定するに当たり、市が取り組むべき新規事業について市民の提案を募った結果、里山交流研修センター事業の原型となるような提案があり採択された。この提案に基づく取組みを廃校後の里山西小学校を活用して実施していくことで、地元の了解と協力を得ることができ、事業の実施に至った。

#### ○宿泊施設への整備について

平成12年9月に供用開始した里山交流研修センターの施設管理業務を受託していた

「里山ねっと・あやべ」が、この研修センターを活動拠点として、都市農村交流事業や定住促進事業に取り組んでいた。その活動は年数を重ねるごとに多様化、拡大し、参加する都市住民の宿泊に対する要望も増大してきたことから、平成15年度に宿泊施設の整備について市と里山ねっと・あやべにおいて検討し、地域住民にも理解を得る中で、都市住民と地域住民の交流を拡大すると同時に新たな事業展開も可能となるよう宿泊施設の整備を計画した。

- ・施設概要 旧小学校の教室棟（鉄筋コンクリート造、2階建て、延床面積784.9㎡）を中心に客室5室、談話室、体験室、研修室2室、食堂、浴室等を整備（宿泊定員：40人 宿泊料：大人3,240円）
- ・整備期間 平成16年度 宿泊棟改修工事調査・設計業務委託(1,522,500円)  
平成17年度 宿泊棟改修工事(58,579,500円)・備品整備(744,030円)
- ・総事業費 60,846,030円
- ・財源 電源立地地域対策補助金(補助率10/10)

#### ○新施設の整備について

平成26年8月に体育館等の旧木造校舎が被災し、その後の整備について検討を始めた9月に、京都府から「森の京都構想」が示され、「森の京都」綾部市マスタープランが策定された。同プランにおいて、里山交流研修センターを市における森の京都の拠点施設として整備することが位置付けられ、平成29年3月完成に向けて整備を行っている。

- ・整備概要 新施設整備（木造平屋建て・延べ床面積308.69㎡／多目的ホール等）  
周辺整備（バーベキューサイト、パーゴラ、駐車場、芝生広場）
- ・総事業費 約195,025千円（予定）
- ・財源 地方創生先行型交付金 5,584千円  
京都府地域創造拠点整備支援交付金 5,000千円  
京都府平成28年度林業・木材産業等振興施設整備交付金 47,541千円  
京都府市町村未来づくり交付金(みらい戦略一括交付金)【予定】

#### ○里山交流センターの運営状況

【役員・職員等】理事10人、監事2人、事務局職員5人、臨時職員等

【事業費規模】約2,400万円

(指定管理料が約1,500万円で約6割、部屋代・飲食代等収入が約4割)

【主な活動内容】米作り塾・石釜パン焼き体験教室・森林ボランティア活動・蕎麦塾  
茶摘み体験・里山交流大学・大学連携・農家民泊 等

#### 【施設利用実績】

	平成21年度	平成22年度	平成23年度	平成24年度	平成25年度
宿泊人数	1,836	802	732	969	959
施設利用人数	6,687	7,217	7,984	9,216	9,228

#### ○利用者の声・今後の方針

利用者からは、安く利用でき、また、音楽の練習や木工作業など、ある程度の音を出すこともできるため、気軽に利用できるとの声がある。宿泊者数は年間約1,000人であるが、さらに利用者を増やす取組みが必要である。

今まで様々な農業体験を行ってきたが、さらに今後は「森の京都」の拠点として、木の価値が分かるような体験を増やしていきたいと考えている。また、最近は大学生の利用が多い状況であり、地域で学生に研修してもらい、そのまま地域での就職に繋げることも強く考えている。

綾部市では、交流から定住につなげる取組みを行っており、この里山交流研修センターでは、その入口となる都市農村交流、体験事業を担い、事業の中で、定住に興味をもった方は市の定住促進課に繋げている。里山の多い綾部の暮らしの入口となる機能を強化し多くの方に来ていただき、また里山で実際に暮らしている先輩方に、ここに来れば会えるという場所になるよう取り組んでいく。

## 主な質疑応答

- 質問 廃校は旧豊里西小学校ではなかったと思うが、選ばれた理由は。
- 回答 廃校は他にもあったが、市街地から比較的早く行ける田舎で、かつ田園地帯で体験に適した場所であったからと聞いている。
- 質問 任意団体の里山ねっと・あやべは、どのような経緯、目的により行政主導で立ち上げたのか。
- 回答 もともと市の総合計画の新規事業として都市農村交流や定住促進の事業の提案があり、一方で廃校利用の課題があり、これらの提案事業を廃校を活用して取り組む方向性ができ、それを実施する組織が必要であるため、里山ねっと・あやべを市の主導で発足し、運営していただいた。平成22年くらいまで市の職員も配置していた。
- 質問 当初のころの事業のPRの方法は。
- 回答 初期は里山塾をやったり、ふるさとのきれいな景色を募集したり、イラストマップを作ったと聞いている。宿泊ができないので、いろんな体験をする中で、この存在を広めていった。ホームページは平成20年頃に開設していた。
- 質問 耐震はクリアしているか。
- 回答 現在、補正予算で耐震の調査費を計上する予定で、予算が認められ、調査の結果、補強が必要となれば、今後補強工事を実施することになる。
- 質問 経費の中で、占める割合が高いのは人件費か。
- 回答 光熱水費もかかるが、圧倒的に大きいのは人件費である。2,400万円の事業規模のうち半分の1,200万円が人件費である。常勤5人とパートタイム職員の人件費である。
- 質問 指定管理料約1,500万円で、4年に1回公募が行われるが、他の企業が応募されたら、NPOが管理者に選ばれない可能性があるが対策は。
- 回答 前回、市外の団体1件の応募があったが、実績により里山ねっと・あやべを指定している。里山ねっと・あやべを守るべきかについても議論が生じると

ころであり対策はとっていない。今後新たに募集するときは、本当に競争するか、単独随契にするか、いったん市役所の中で議論したうえで募集したい。

質問 農業林業の担い手不足の問題があるが、里山ねっと・あやべの取組みが農業林業の活性化につながっているか。

回答 この事業はあくまでも体験であって、専門になることは難しい。専門農家になりたい方には、この地区にある京都府立農業大学校を紹介している。

質問 「森の京都」拠点施設は、事業費のほとんどに交付金が充当されているか。

回答 実施設計業務の財源は全て交付金である。工事については、工事の半分が府内産木材を使うということで京都府林業・木材産業等振興施設整備交付金47,541千円を予定している。残りの工事費約1億円の1/2を、みらい戦略一括交付金を予定しているが、正式な回答はまだもらっていない。

## 調査結果のまとめ

- ・綾部市では、廃校施設を里山交流施設として整備し、農林業分野での後継者不足により受入れ体制が難しいという課題もある中で、交流から定住に結び付ける取組みがなされており、参考になった。
- ・閉校となる前の早い段階で利活用の検討を進め、行政が後押ししながら進めた里山交流事業が空き家対策に繋がった効果は、注目すべき点である。定年退職後に都会を離れゆっくりしたい世代と、田舎で農業がしたい30代前半世代をターゲットにした綾部市の定住促進の取組みをぜひ参考にして、関市でもぜひ進めるべきであると考え。
- ・関市にも豊かな自然があり、廃校施設を活用した里山交流事業は市内や県内はもちろん名古屋圏からの集客も見込める可能性があり、実施できるのではないかと感じた。課題は、どの組織を運営主体とするかであり、綾部市のように当初は行政主導で組織を立ち上げ、その後NPOや地域委員会に移管することも一つの方法であると考え。
- ・里山交流を定住促進に繋げる手法として民泊もあり、一定の公費を投入し担い手となる住民組織の育成に力を入れた取組みは大変参考になった。
- ・綾部市では、補助金等を有効に活用し施設整備が行われていると感じた。関市において廃校施設を宿泊施設へ再整備した場合、全国的には同様の施設があるため集客競争が生じることが考えられる。長期的に市または指定管理者が宿泊施設を管理運営していくとなると、採算面や指定管理料の負担増が危惧される。関市における利活用については、別の角度からの検討も必要ではないかと感じた。その地区の活性化に繋がられるよう運営方法も含め多方面からの検討を行い、行政と地域が一体となり取り組む必要があると考え。

## 視察No.2 地域資源を活用した観光振興の取組みについて

訪問日時 平成28年10月25日（火） 10時00分～12時00分

訪問先 所在地 福井県小浜市川崎3-4  
名称 御食国若狭おばま食文化館  
担当部署 企画部食のまちづくり課・産業部商工観光課

### 説明内容（概要）

小浜市は、福井県南西部に位置する、面積約233km<sup>2</sup>、人口約3万人のまちである。若狭湾は、暖流と寒流が交差することから良好な漁場が形成され、小浜市は若狭湾由来の海産物や塩を朝廷に献上した歴史をもつ伝統的な食のまちであり「御食国（みけつくに）」と称された。また、小浜地区西部地域は、歴史遺産や文化が現在まで非常に多く継承されており、小浜の魅力と個性を醸し出す重要な地域である。

小浜市における地域資源を活用したまちづくりの主な取組みは、次のとおりである。

#### 1 食のまちづくり

##### ○取組みの背景及び内容

小浜市には御食国の由緒ある歴史、現在も受け継がれている豊かな食や食文化、それに向き合う暮らし方があった。このような地域の宝を再度見つめ直そうと、「食のまちづくり」が平成12年8月にスタートし、平成13年9月に全国で初めて食をテーマとした自治基本条例「食のまちづくり条例」を制定し理念を定めた。

また、平成15年に、食のまちづくり条例で重要な分野として位置付けている食育の拠点施設として食文化館をオープンした。1階は食文化を見て回るミュージアムで、併設されている「キッズ・キッチン」で食文化を作り味わうことができ、2階では若狭塗箸などの伝統工芸を見て体験することができ、五感を使って楽しめる施設となっている。食育の取組みとして、保育園児、幼稚園児、小中学生などの子どもを対象として農業体験・水産体験を行い、また、キッズ・キッチンなどで郷土料理を作ったり、魚をさばくなどの調理体験を実施している。さらに、市内全小中学校における校区内型地場産学校給食が実施されている。

##### ○成果及び今後の方向性

平成23年度から27年度までの小浜市元気食育推進計画が作成されており、平成22年度末に行われた前計画の検証では、キッズ・キッチンや学校給食などの教育や食文化継承の分野における成果が評価されている一方で、一次産業をはじめとした産業面への普及が課題として挙げられていた。その産業面に関して、平成25年度に川崎地区活性化計画を策定し、漁港や市場、観光施設など食に関する施設が集積する川崎地区一帯を海の駅と位置付け、イベントで利用できるスペースとして「海のガーデン」や、新鮮な魚介類を楽しんでもらう「七輪焼き広場」などを整備し、食文化館も平成27年にリニューアルして市内の観光インフォメーションの強化を行っている。

また、平成27年のミラノ万博に小浜市単独で出展し、キッズ・キッチンと若狭塗箸

の研ぎ出し体験を行った。これを機に世界へ小浜の食文化を強く発信し、産業の活性化にも繋げていく方向である。

## 2 「まちなか回遊」プロジェクト

### ○3駅連携構想

平成22年6月の小浜市中心市街地活性化基本計画において、市中心部にある、つばき回廊商業棟跡地を「まちの駅」、食文化館を「海の駅」、小浜IC近くに整備する道の駅を「道の駅」と位置付け、この3駅の連携により、まちの賑わいを創出していくことが提案された。

- ◆まちの駅：観光拠点、まち歩きの拠点、まちなかのシンボル
- ◆海の駅：海や食をキーワードにした体験が楽しめる拠点
- ◆道の駅：マイカー利用者のまちなか誘導の拠点

### ○小浜地区中・西部地域の整備

多くの観光資源が集積する小浜地区中・西部地域にまちあるき観光基盤を整備するため、平成25年8月に「小浜市観光まちづくり計画」を策定した。平成26年度から30年度までの概算整備事業費は11億円で、国の社会資本整備総合交付金(補助率40%)及び県の観光まちなみ魅力アップ事業補助金(補助率30%・40%)を活用して事業を進めている。

#### 【6つの方針・事業内容】

- ① 歴史・伝統など地域の魅力を高め、次代へ継承する(街路整備・電線地中化、神社や寺の参道整備及びライトアップ等)
- ② 歴史・伝統・文化・自然を学び、体験できる機会を拡大する(史跡公園整備、茶屋文化体験、外国人着付け教室、町家ペンション等)
- ③ 心豊かで快適な生活環境を創出する(浸水対策、防火施設の充実、一門一灯運動等)
- ④ 楽しみながら歩ける環境を創出する(まちの駅整備、ポケットパーク整備、ガイドダンス施設・トイレ整備、歩行者案内サインの整備、まちあるき観光ツアー等)
- ⑤ 地域ぐるみ・住民主体によるおもてなし運動を推進する
- ⑥ 地域の魅力を内外にアピールする(観光と産業が一体となったPR等)

### ○まちの駅の整備

まちの駅は、小浜市の中心に位置しJR小浜駅からも近く、周辺には病院や図書館などの公共公益施設が立地し、重伝建地区など地域資源からも近く、まちなか回遊の拠点となる。ここでの様々な取組みを出発点として周辺部のまちづくりを活性化させるためにも、小浜市観光まちづくり計画の先導プロジェクトとして位置付けられ、平成28年5月にオープンした。まちの駅には、明治期の芝居小屋であった旭座を復元・移転し、海産物・特産物販売を行い、レンタサイクルを設置した。また、3駅それぞれライブカメラで現状が分かるようにしてあり、3駅周遊のレトロバスを土日祝日に運行している。施設の管理は、旭座と一括して指定管理者を指定している。

### ○今後の課題及び方針

まちの駅は、まち歩きの拠点として整備し、オープン直後は地域の方の盛り上げに

より賑わいがあったが、オープン後、急に観光客が増加する状況にはならず、今後、限界をもう少し魅力あるものにしていかなければならない。土日は様々なイベントが催されているが平日は少なく、また広場の利用が少ないなどの課題があり、これからの進め方を検討している。5カ月で11万5,000人ほどの集客ができたが、まち歩きをしていただくには、まだもの足りない部分もあるため、道中に在る空家を活用しながら、3駅構想で多くの方に来てもらえるよう取り組んでいく。

## 主な質疑応答

質問 食文化館は自主財源で建設したのか。

回答 当初は、電源三法交付金を受け、総事業費約15億4,000万円で建設した。

質問 市外の方も含め、食文化館の来館状況は。

回答 キッズ・キッチンについては、市外からの来客もあるが市内の方が中心である。市外の方には、ブルーツーリズムなどと連携して、魚を食べた後は食文化館で工芸体験をやってもらっている。関西、中部地方の方は非常に多い。

質問 食のまちづくり、観光まちづくり計画において、大学との連携はあるか。

回答 福井県立大学とは、鯖を生で食べられるような養殖の研究や、鯖の醤油干しの研究などで連携し、売り出している。

質問 まちの駅近くの駐車場には、何台駐車できるか。

回答 約100台駐車できる。大型バスも駐車できる。

質問 小浜縦貫線整備は、どこからどこまでか。

回答 いづみ町商店街の道路を拡幅し、いづみ町から小浜ICのほうに向かう道路である。約3年で完成すると、小浜ICからまちの駅まで直線で来られるようになる。

質問 小浜地区中・西部地域整備の中の、一門一灯運動とはどのような取組みか。

回答 小浜西組町並み協議会の取組みである。旧丹後街道の街路沿いの各家先に行灯を置いて、特にイベントの際に使っている。

質問 小浜地区中・西部地域のエリアはどのくらいの広さで、建築規制はあるのか。

回答 まちの駅から南西方向へ1キロほどある。重伝建地区となっているところは、増改築時に規制が掛かる。通りに基準があり、文化課で認定された後、外観に対して補助が出る。

質問 まちの駅の指定管理料はどのくらいか。

回答 約1,500万円である。今年度から始まったので、実績により次年度から調整が入る予定である。



質問 3駅を結ぶレトロバスの運営も指定管理者で行っているのか。

回答 バス運営は、地元の運行会社に委託している。

質問 レンタサイクルで回るとは、距離的に問題ないか。

回答 まちの駅にも食文化館にもレンタサイクルがあり、利用者は大変多い。小浜駅にも観光協会でもレンタサイクルを設置している。

## 調査結果のまとめ

- ・食のまちづくり条例を制定して、小浜市の歴史と伝統、暮らしに根付いた食をまちづくりの中心に据えたことは、とても良い取り組みであると感じた。市役所の組織機構改革で企画部内に「食のまちづくり課」を配置し企画立案等を行い、現在は、食文化館内に食のまちづくり課が設置されている。また、ミラノ万博に小浜市単独で出展され、そこまでの意気込みで取り組まれていることに感銘を受けた。全市内小中学校で校区内型地場産学校給食を実施し、地域の暮らしと学校給食を結び付ける取り組みもあり、関市においても板取地域や小規模の学校給食センターでは、地元産をもっと活用することができるのではないかと考える。
- ・食文化館の建設に当たり、小浜市では電源三法交付金を活用されており、関市とは状況が異なる。関市における観光施設の整備については、将来にわたり市が負担する維持管理費も考慮しながら計画する必要がある。
- ・食文化館は立派な施設であり、展示品を活用する技術レベルが高い。ある程度の費用をかけなければ、集客できる魅力ある施設はできないのではないかと感じた。キッズ・キッチンを参考にし、関市では、例えば刃物ミュージアム回廊に關の刃物を使った体験型のキッチンスタジアムを整備し、そこを親子料理教室や食育事業で使うこともでき、調理しながら様々な種類の包丁やキッチンバサミなどの調理器具について学ぶこともできるのではと考える。
- ・小浜市で今年度整備されたまちの駅の指定管理料は約1,500万円とのことで、刃物ミュージアム回廊整備については、市が負担する管理運営費を十分に検証しながら、観光振興の計画を立てていかなければならないと感じた。
- ・今後整備する刃物ミュージアム回廊は、オープン直後の珍しい時期は集客できるであろうが、長年にわたって集客し続けられるかということが課題である。今から、どのようにPRし、何度も足を運んでいただけるようにしていくかについて、完成までにビジョンをつくる必要がある。
- ・3駅をうまく繋いだ回遊プロジェクトにより観光振興に取り組んでおられることは成功例だと感じた。刃物ミュージアム回廊については、どこから観光客が入られても楽しめるような内容にしていくべきであり、そのためにも現在の計画以外の場所にも駐車場確保が必要であり、また市内を周っていただくにはレンタサイクルが必

要であると感じた。また、観光客を本町通りに呼び込み、商店街も活性化できるよう考えていくべきである。

- ・ 3 駅連携構想によるまちの賑わい創出については、関市の場合、例えば刃物ミュージアム回廊をまちの駅にし、小瀬鵜飼や長良川、円空、ゆずやキウイ、モネの池、桜などに「駅」という統一した名前を付けて、いろいろな地域の観光を併せてしていただく手法も考えられるのではと思います、参考になった。
- ・ 小浜市は、食のまちづくりと、まちなか回遊プロジェクトの両方に取り組み、そこには単に市外の人を呼び込んで終わるのではなく、なるべく多くの地域の人に関わっていただくという発想があり、学ぶべき点である。関市の刃物ミュージアム回廊も、まちの中も周ってもらえるような面的な広がりをもった計画を今後考えていくことが大事であるし、そこに地域の人はどう関わっていくかという視点をもって考えていく必要がある。